指定研究・海外仏教研究　研究会報告

近代仏教学の動向
――日本と西洋の比較――

ウィスコンシン大学教授　清田　実

一　十九世紀ヨーロッパに於ける近代仏教学

今日我々が知る仏教学は、文献学・哲学・歴史学等を取り入れ、過去二五〇〇年に亘ってアジア諸地域に遍在する仏教資料の組織的且つ精緻な研究に重点が置かれている。この種の仏教研究の淵源はヨーロッパ、特に十九世紀のイギリス及びフランスに求めることができる。当時この二国家はアジア諸地域を植民地として支配し、それら諸地域への関心を深めた。特にフランスの合理主義思想が近代仏教学の発展に寄与した事は無視することはできない。

当初のヨーロッパに於ける仏教への関心は、パーリ語、サンスクリット語の研究に焦点が置かれた。一八二一年にはAlexander Johnstonがシンハリーズの*Rajavali*の翻訳を基に*The Sacred and Historical Work of Ceylon*を公刊し、一八二六年には、Christian LassenとEugène Burnoufによって*Essai sun Le Pali*が出版され、一八七五年には、Robert Caesar Childersが*Dictionary on the Pali Language*を完成した。そして、一八八一年には、Thomas William

Rhys Davids の努力によって Pāli Text Society が設立された。ここで Rhys Davids に関して一言を労する必要がある。若くしてセイロンに渡った彼は、そこでパーリ仏教への関心を深め、一八七六年、イギリスに帰着、その後ロンドン大学、マンチェスター大学で、パーリ語及びパーリ仏教を講ずる傍ら多くの書を公にした。それらは、*Buddhism*（一八七七）、*Buddhist Birth Stories*（一八八〇）、*The Questions of King Milinda*（一八九〇）等である。

それよりやや早く、一八二六年に、Brian Honghton Hodgson は、"Notice of the Languages, Literature and Religion of Nepal and Tibet" を *Asiatic Researches* に発表し、彼が長年に亘って収集した貴重なサンスクリット資料を紹介し、仏教の組織的研究に寄与した。文献学の奇才、Eugène Burnouf は、Hodgson の収集した資料を基にして、一八四四年に、*Introduction à l'histoire du Buddhismeindien et le Lotus de la Bonne Loi* を公刊した。これは近代に於ける仏教の歴史的研究の魁を成す業績であった。彼の学生であった Friedrich Max Müller は、その文献学的、歴史学的方法を受け継ぎ、サンスクリット学の基礎を築き、オックスフォード大学で言語学と宗教を講じ、*Buddhism and Buddhist Pilgrims*（一八五七）、*History of Ancient Sanskrit Literature*（一八五九）、*Einleitung in die Yerglsichende Religionswissenschaft*（一八七四）、*Origin and Growth of Religion*（一八七八）、*Dhammapada*（一八八一）、*Six Systems of Indian Philosophy*（一八九九）等を発表した。それらの研究書は、今日と雖もなおその高い評価は失われていない。しかし、彼の最大の業績は、一八九七年から一九一〇年に及んで成された *The Sacred Book of the East* の編集である。

これらの近代仏教学の先駆者の他にも多くの業績を見のがすことはできない。例えば、*Dīpavaṃsa*（一八七九）、*Vinaya Piṭaka*（一八八〇）、*Buddha : Sein Leben, seine Lehre, Seine Gemeinde*（一八八一）、*Theragāthā and Therigāthā*（一八八三）等を公刊した Herman Oldenberg, や *Materiaux Pour l'etude du système Vijñaptimātra*（一九三二）等を出版

したSylvain Lèviである。更に、Sylvain Lèviは、高楠順次郎、Paul Demièvilleと共に、仏訳仏教辞典『法宝義林』の刊行に努力し、Louis de la Vallée Poussinは*Madhyamakāvatāra*（一九〇七―一九一一）、*L'Abhidharmakośa de Vasubandhu*（一九二三―三一）、*Vijñaptimātratāsiddhi, la Siddhi de Hiuan-Tsang*（一九二八―二九）等を発表した。又、Th. Stcherbatskyは、*The Central Conception of Buddhism and the Meaning of the Word 'Dharma'*（一九二三）、*The Conception of Buddhist Nirvāna*（一九二七）、*Buddhist Logic*（一九三〇―一九三二）等を公刊した。そして、E. Obermillerは、*Abhisamayālankāra*（一九二九）、*The Sublime Science of the Great Vehicle to Salvation*（一九三〇）等を公にした。又、Paul Demièvilleは、先のSylvain Lèviの発意による『法宝義林』の刊行事業に加わり、更に*Historique du Système Vijñaptimātra*（一九三二）等を出版した。これらの研究に於いては、文献学的方法論によって、仏教思想の客観的な分析が成されている。近代仏教学は文献の吟味、それらの哲学的分析解釈、そして文献の思想史としての位置付けが要求されている。

二　日本に於ける近代仏教学の発展

過去一五〇年に亘り、西洋の学問が近代仏教学の発展に於いて重要な意義を有したが、日本の近代仏教学の貢献も見のがすことはできない。日本に於ける近代仏教学は、十九世紀後半の明治時代に開始された。明治時代は、日本の国家としての近代化の時代でもあった。国家主義がその時代の風潮を支配し、国威高揚の下に、西洋の技術・学問が旺盛に摂取され、多くの学生が国の援助によって西洋へ留学した。仏教とても例外ではなかった。ここで特記すべき

事は、一八七一年に、島地黙雷と梅上沢融が岩倉具視使節団に伴って、西洋の宗教事情を視察した事であり、そしてそれに次ぐ仏教学研究の日本人学生の留学である。しかし、こうした西洋への留学生の中で、日本の近代仏教学へ顕著な影響を与えたのは、東本願寺の留学生、南条文雄と笠原研寿である。彼らは、岩倉使節団より早く一八七〇年に日本を発ち、英国にてMax Müllerの下で、サンスクリットを修めた。笠原は後に結核で没したが、Max Müllerは、一八八三年九月二十二日のロンドンタイムス紙に「故笠原研寿氏」として略歴を紹介している。その略歴には、惜しみなく彼を賞讃しており、笠原がMax Müllerの愛弟子の一人であった事を物語っている。一方、南条は「英文明蔵目録」を編集し、そして日本へ近代的なサンスクリット研究を最初に紹介した。

歴史的には少し戻るが、ここで多少興味あることは、西本願寺が一五九一年に豊臣秀吉の援助により創立されたのに対して、東本願寺は一六〇二年に、徳川家康の援助の下に創立されたという事実である。東本願寺は、江戸時代、幕府から大いなる恩恵を受けていた。であるが故に反徳川体制の名の下で興った明治政府は、暗黙のうちに西本願寺を援護し、岩倉使節団にも、西本願寺関係者を招き、東本願寺関係者を加えることはなかった。西本願寺はこうした政治的利点を得て、明治政府から反体制とみなされた他の宗派をよそに、当時諸々の事業を推し進めていった。こうして、西本願寺を初めとし、東本願寺、それらに続く高田派といった浄土真宗の諸派が宗門の近代化を手懸け、他の諸宗もそれに続いた。当時の仏教指導者にとっても、近代化とは、近代ヨーロッパの学問に接することを意味した。

一八八二年に、西本願寺は藤枝沢通と藤島了隠をフランスへ、管了法をイギリスへ送った。藤枝はSylvain Lèviの下で学び、藤島は*Le Bouddhisme Japonaise*を一八八九年に著作したが、それが西欧の言語による最初の日本仏教紹介の書となった。管は、南条とともにMax Müllerの下でサンスクリットを学んだが、西洋哲学、倫理学にも関心

を示した。更に、高田派の常盤井堯猷は、一八八六年、ドイツに留学し、西本願寺の高楠順次郎は、一八九〇年に日本を発ち、イギリス、フランス、ドイツにてサンスクリット、チベット語、インド哲学を学んだ。これらの諸氏は、日本へ戻り、サンスクリットやインド哲学の啓発に努めた。これらの先学に触発され、松本文三郎、荻原雲来、姉崎正治、渡辺海旭、藤井宣正といった戦前の著名な仏教学者たちは、いっせいにヨーロッパに留学したのである。現在の日本の仏教学の長老宮本正尊、山口益（一九七六年没）両氏は、イギリス、フランスへそれぞれ留学している。山口博士はフランスの学問研究に限り無い敬意を表した。『唯識二十論』、『摂大乗論』、『中辺分別論』等の諸論についてなされた山口博士の著作は、国際的に高く評価されている。更に、二十世紀初期、非常な困難にもかかわらず、河口慧海、寺本婉雅、多田等観、青木文教の諸氏はチベットへ渡り、数多くのチベット語の仏典を持ち帰り、チベット資料を請来し、総合的な仏教研究の道を開く為の努力をなした。ところで、ヨーロッパの学問研究が、伝統的な日本の仏教研究にもたらした最大の貢献は一体何であったのだろう。

伝統的な仏教研究は、中国に於いて展開した宗派仏教、すなわち法相、天台、華厳といった諸宗の研究であった。このような研究は、唐代に発達した教相判釈的研究であり、自己の信奉する教義の優位性を明かし、その祖師は無批判に尊崇され、更に理論や実践の根拠となっているその宗派以外の経典と仏教思想の歴史的展開の吟味が怠られていた。この様な伝統が日本に於いても継承されていたのである。ここで我々が留意しておかなくてはならない事は、一つの経典は、必ずしも直線的な展開の上に存するのではないという事である。仏教文献の展開の歴史はもっと複雑な要素を含んでいる。すなわち、それぞれの経典は独自の見解を成しており、その著者がその時代に相応する思想的疑惑とその疑惑に応答する思索の前提を暗黙のうちに立て、思索を練り、一つの思想体系を樹立した点に留意しなくて

はならない。換言すれば、一つの経典が構成され、その構成の過程に於いて、それ以前に形成された思想を考慮し、著者自身の見解が新たに示されている事である。仏教思想展開の歴史を理解するには、これらの諸問題が考慮されなければならない。何故ならば、近代仏教学は単に固定化された教相判釈、つまり独善的に既存の宗派的教義高揚のために企てられた学説の理解ではないからである。故に、近代仏教学では教相判釈の批判が促され、祖師の所説が精密に検討されるのである。このように明治期の仏教学は、ヨーロッパの近代的学風に接した多くの先達によって新たな刺激がもたらされた。更に、ヨーロッパの学界に於いて近代的パーリ語、サンスクリット語、チベット語研究、又は中央アジアに関する歴史的、文化的、言語的研究といった新たな分野が開かれたが、これらの諸分野に於いても、日本の仏教学者は大いなる貢献を果たしてきた。しかし、これらの貢献のうち、山口益、長尾雅人、平川彰、梶山雄一、高崎直道等といった諸氏の業績を除くと他は西欧に於いてはあまり良く知られていないし、少なくとも幅広く利用されてはいない。何故そうなのであろう。

先ず第一の批判。日本の仏教学者の業績の中には、実質的に非常に貴重なものも見出し得るが、それらの多くは迂言を以ての文章表現、あるいは論理の飛躍といった事が度々指摘され、一貫した構成が欠けている。このような情況は、研究上、日本語文献を駆使しようと試みる西欧の仏教学者の憤激を買っている。というのは、これらの文献を利用するという事は、回りくどい表現の文章を再構成して通常の英語に翻訳することではあるが、それが殆んど不可能な場合が多くあるからである。このような情況の下でも、それらの文献を利用しようとした場合、それらは、思想過程の細部を全く無視して結論を導いたり、感じたままに要約しているために、それらの文献の本質を失わざるを得ない。もう一つの課題は、日本に於いて仏教学の諸業績を効果的に翻訳するための熟達した翻訳者の共同事業の企画が、

未だ成されていないという事である。この事が上記の問題を一層深刻なものにしている。（例えば、日本の仏教学関係雑誌に於ける論文の題名の英訳であるが、それらは明らかに英語文化圏の読者を意識したものであろうが、それらの多くは至って理解し難い。）この事は恐らく英語の翻訳者があまり評価されていないという事実に起因しているのであろう。しかし、その企画はさて置いても、日本の文献を利用せんとする西欧の研究者は、自ら翻訳を試みて利用するか、あるいは他の者の翻訳を利用するかであるが、その時、日本文の文脈自体を推測し得るに至っても、根本的な思想の不明瞭さ（それを日本人は〝学問的〟と特徴づけるかもしれないが）は取り除く事はできない。

例えば、辻善之助博士の『日本仏教史』、花山信勝博士の労作「三経義疏関係の諸著作」、矢吹慶輝の『三階教の研究』等は、文献学的・歴史学的研究を代表するものであるが、これらの全ては非常に理解し難い文体で表現されている。私は何も意地悪くこれらの著名な学者の欠点を指摘している訳ではない。むしろここで私が言いたい事は、西欧の学者の興味関心をひくためには（日本の学者についても同様であるが）、その研究内容は一貫した構成の下に読者に理解可能な言語によって表現されるべきだという事である。

もちろん例外もある。例えば、長尾雅人博士の編集によって近年公刊せられた『大乗仏典』（全十五巻、一九七三―一九七六）等は、文献学的であり、且つ文章表現に於いても充分な考慮が成されている。更に、戦後の学制に接している多くの日本の仏教学者、例えば、瓜生津隆真、荒牧典俊、川崎信定といった諸氏は、卓越した文体を誇っている。しかし、不十分な文章表現、一貫性を欠いた構成といった日本の仏教学関係の業績全般に指摘され得る主要な批判は残る。このような情況の下で、日本語をある程度修得した西欧人にとって、二つの選択がせまられるのである。無限の忍耐を以って理解困難な文章の判読に努めるか、日本の仏教学者の業績を放棄してしまうかである。しかし、

日本の仏教学者だけが、〝仏教混淆日本語〟（所謂“Hybrid Japanese”）なるものを助長してきたわけではない。西欧の仏教学者の中にもそのような事は度々見受けられる。例えば、Paul Griffiths が彼のエッセイ“Buddhist Hybrid English: Some Notes on Philology and Hermeneutics for Buddhologist”の中で巧みに物語っているように、西欧の学者も同じように粗野な言語を助長してきたのである。[1] しかし、ここでは、私は特に日本の仏教学に指摘される批判に焦点を当ててみたい。

第二の批判。サンスクリット、パーリ、チベットの諸言語を利用している日本の仏教学者（例えば、山口益、長尾雅人、梶山雄一、高崎直道、櫻部建、前田恵学等諸氏）に於いては、分野を同じくする西欧の学者とのある程度の交流は成されてきた。この事は言うまでもなく、これらの諸言語を基盤にした近代仏教学は西洋の学問の所産に他ならないからである。これとは対照的に、東アジア（中国、朝鮮、日本）の仏教に関する研究は、実際的に日本の研究者に支配されているという事実にもかかわらず、この分野に関する日本の業績は、西欧の仏教学者によって幅広く利用されているとは言えない。この事は、この分野に関する西欧の仏教研究者の中に、日本語資料を効果的に駆使できる者が、極めて少ないという事実に起因している。こう言えば、ここで一つの議論を招くであろう。それは、サンスクリット、パーリ、チベット諸言語を基盤とした近代仏教学は、西洋の学問的成果であるから、これらの学問的成果に興味関心を示すものは、西欧の諸言語の修得が必要とせられる（現にこの分野の多くの日本の仏教学者はそうしてきた）。同じように、日本語を基盤とした近代仏教学は、日本の学問的成果であるから、この分野に関心を示す西欧の研究者も又、日本語の修得が必要とせられる。

もちろんこれは当然の議論であろう。しかし、現時点に於いては、日本語は英語やフランス語ほどには国際語とし

ての立場を確立してはいない。更に、日本語の仏教学者が理解困難な文章表現を続ける限り、東アジアの仏教に関心を示す西欧の仏教学者は、日本語の諸資料を駆使することに苛立ちを示さざるを得ない。過去十年間に亘って、東アジア仏教に関する将来有望なアメリカ人の研究者（例えばDiana Paul, Paul Groner, Aaron Koseki, William Grosnick, John Keenan, Sallie King等）を養成してきたのは事実であるが、この分野の西欧の研究者の育成は、多分に日本の研究者の業績に触発されて成されるべきである。

第三の批判。日本の仏教学に於ける研究業績の殆んどは、その著者と彼が取り扱っている文献、あるいは諸文献との対話（それを〝モノローグ〟と称せられるかもしれない）によって成され、著者と読者との対話ではない。日本の仏教学関係の業績は、一般的に、〝独自的〟な傾向を有している。この事は、今日の日本の仏教学が高度に専門化し、文献研究に非常な力点が置かれている事に起因しているからかも知れない。勿論、この種の研究は、大いなる意義を有している。しかし、諸文献の仏教思想展開の歴史に於ける位置付け、あるいは特定の歴史的背景の下での仏教思想の考察、そして現代人が遭遇している諸問題との関連性といった点についてはあまり触れられてはいない。日本の仏教学者の諸業績を全く無意味だとは言ってはいない。むしろ、その研究の深さは尊敬を集めているし、西欧の学者はそれから大いに学ばなければならない。しかし、もし日本の仏教学者が、国際的な評価を勝ち得ようと望むなら、鋭敏にそれらの読者を認知し、研究のテーマを明確に示し、そのテーマ説明のために用いられる方法論を明確にし、一貫した構成の下に説明されなければならない。

要するに、以上の批判は、日本の仏教学を中傷するために成されたのではない。というのは、日本には西洋の近代的学問研究方法が巧みに取り入れられ、精緻な比較文献学という方法を確立し（サンスクリット、パーリ、チベット

及び漢訳資料が駆使されている）、それはやがて実証的歴史的研究の方法を高揚せしめた事を私は認めるからである。例えば、山口博士の『大乗としての浄土』に於いては、中国、日本に展開する浄土教思想を大乗仏教、特に中観、唯識思想の展開の歴史という観点から論じられている。柳田聖山氏の「禅思想の成立」（『仏教の思想』第七巻・角川書店刊）は、禅思想の展開の歴史を、所謂、禅宗史という範囲を超えて、「スッタニパータ」にまで遡って論じられている。袴谷憲昭氏は『玄奘』（一九八一年公刊）に於いて、「仏教史の中の玄奘」と題して、仏教思想展開の歴史という観点に基づいて玄奘を描写している。これらすべて一級の文献学者は、仏教思想を地理的あるいは宗派的な限定を設けず、思想や人物を仏教思想展開の歴史という大きな枠組の中で捉えようとしている。この事に関連して一つ銘記しておかなければならないことがある。大乗仏教に於いては、仏陀の歴史的実在性、そして諸々の仏教文献がその史的実在人物の思想を反映しているか否かといった事はもはや我々の関心を示すところではなく、むしろ思想の展開そのものに我々の関心があるのである。何故ならば、近代仏教学は思想概念の理解、伝承、受容という過程を経て、仏教が紹介された諸国家の文化的内容を高めてきたという歴史的事実を研究対象としているからである。中央アジアや中国に於いては、所謂〝疑経〟というものを成立せしめているが、私の見解では、こうした諸文献の中にこそ仏教受容の展開が跡付けられるべきである。今日のアジアに於ける仏教の事情を理解する為には、歴史的に、もっとダイナミックな考察が要求されている。この様な立場から、先程から述べている山口、柳田、袴谷といった諸氏が駆使せられているような、文献学的且つ歴史的方法が要求される。

更に、日本の仏教学者の素晴らしい共同事業によって、仏教辞典、百科辞典、目録、索引、あるいは他の基本的参考文献が製作されているが、それらは一五〇〇年に亘って引き継がれてきた仏教研究の伝統の中で蓄積せられた諸文

献とそれらに関する知識の所産といえる。例えば、『仏書解説大辞典』（第一巻、一九三三年公刊、最終十三巻一九七八年公刊）は、数十年にも及んで成された日本の仏教学者の共同事業の成果である。又、『阿毘達磨倶舎論索引』（全三巻、第一巻梵漢、第二巻漢梵、第三巻蔵梵）は、平川彰博士と博士の弟子にあたる平井俊栄、吉津宜英、袴谷憲昭、高橋壮諸氏との共同事業であり、十年以上費やして完成されている。そして、最後に付け加えておかなければならない事は、日本の仏教学者が仏教関係出版物という点では、世界をリードしているという現状である。

これまで私は日本人学者に対して数々の功罪を述べてきたが、ここでは逆に西欧の学者の批判を試みてみよう。西欧の著名な仏教学者の一人であるEdward Conzeが述べている中に、明らかな誤解と思われる点がある。それは、仏教研究には「中国語、日本語の知識の欠如はさ程重要な問題ではない。」[2]という一言である。その誤解は、特に日本語に関しては明らかに指摘されるべきである。もう一点について述べてみたい。それは、彼の最近公刊の『回顧録』に於いて述べている興味深い一点である。

「過去四〇〇年に亘って成された諸々の事業は、全ての人種に勝る白人によって成された。彼ら白人は、仏教学という、あまり白人には似つかわしくない分野に於いてさえ、顕著なる業績を収めてきた。仏教学と言えば、東洋人の領域と見なされがちだが、事実、東洋人の学者に於いてさえ、白人と共に学んだものだけが重要視された。」[3]

このような見解は、辛辣な偏見に他ならないが、皮肉にもある意味で、真実性はある。例えば、梶山、荒牧、湯山明といった若干の現在著名なる日本の仏教学者、あるいは戦前ヨーロッパに留学した諸氏、これら全てはヨーロッパに於いて学んでいる。しかし、Conzeの無視していることは、日本の著名なる学者、例えば、長尾、平川、横超慧日、

安井広済、櫻部建といった諸氏、あるいはもっと若い世代の仏教学者、例えば、平井俊栄、鎌田茂雄、小川一乗といった諸氏は西欧に於いて専門的に学んでいないにもかかわらず、多くのアメリカ人の学生は今や、彼らの下で学ばんとして日本へ群がって来るのである。今日の仏教学は、もはや特定の人種、国家の独占を許しはしない。むしろ、仏教学も他の学問の形態と同じように、その発展は、国際的なスケールで成されている。十九世紀のヨーロッパが仏教学の進展に大きな貢献を成したという事実は、歴史的な情況によるもので、つまり十八世紀の啓蒙思想の影響と、植民地政策（特に、イギリスとフランス）がアジアの研究への興味をかり立てたのである。チベットに於いては、中世、中国に於いては唐代、そして日本に於いては、平安・鎌倉時代が仏教研究高揚の時となった。今日、我々は仏教研究の分野に於いて、日本人の業績を無視して、西欧人の業績のみに頼って研究に従事する事は不可能なのである。

三　問題と展望

昨今の仏教学者の貢献にもかかわらず、近代仏教学には様々な問題が課せられている。その意味では、我々はもはや西欧の仏教学、あるいは日本の仏教学といったような区別はなく、近代仏教学そのものについて述べる必要がある。

第一に、仏典の翻訳については、Conze が次に語るように、未だに準備段階である。

「今のところ大乗経典の恐らく五％までが信頼できる校正が成されており、二％までが理解可能な翻訳が成されている。このような不十分な資料を駆使して成される推論には疑惑が残ることは明らかである。」(4)

Conze は中国語も日本語も読めないのであるから、我々がもし、サンスクリットやパーリの原典に現存しない漢訳の存する経典・律典、及び論書、あるいは古くから漢訳・日本語・チベット語によって成されている注釈や研究をも

考慮するならば、上記の数字はもっと低いものとなるであろう。しかし、現代の仏教学は経典等の校正や翻訳だけが要求されているのではなく、諸資料の批判的吟味、特に仏教思想の展開を理解する上では、サンスクリット、漢訳、チベット訳が駆使される比較文献的研究が要求されており、そのような業績は先に示したような山口・柳田・袴谷といった諸氏によって成されている。昨今の仏教学の業績として若干挙げると、Lamotte の *L'Enseignement du Vimālakīrti*（一九六二）、David Ruegg の *La Théorie du Tathāgatagarba et du Gotra*（一九六九）や高崎直道氏の『如来蔵思想の形成』（一九七四）、あるいは平井俊栄氏の『中国般若思想史研究』（一九七六）、そして *Mahāyāna Buddhist Meditation: Theory and Practice*（清田実編集、一九七八）等があるが、これらは全て文献学的方法の下に、それぞれの題材にそって教義内容を客観的に述べている。しかし、Conze が正当に指摘するように「不十分な資料を駆使して成される推論には疑惑が残る」のであり、チベット大蔵経には四千を超える仏教資料が存し、ほぼ同数の漢訳資料が現存している事実がそれを物語っている。

第二に、近代仏教学では、歴史的知識、すなわち史的文化的背景を下にして仏教の起源及びその後の展開を跡付けることが強調されている。例えば *Sacred Books of the East* は、単なる仏教典籍の集成ではなく、仏教外の、例えば『マヌの法典』やジャイナ教の典籍も含まれている。そして Rhys Davids の *Buddhist India*（一九〇三）では、仏陀の生涯と教義だけではなく、当時の文化的・社会的・政治的制度にまで及んで述べられている。更に、Oldenberg の *Buddha: Sein Leben, seine Lehre, Seine Gemeinde* は、パーリ資料をもとにして仏陀を史的実在人物として述べられ、仏教学研究史上、最初の業績であることを銘記しなくてはならない。こうした歴史的方法論は、中国語の南アジア、中央アジア、東南アジアに関する歴史的資料、例えば、法顕の『仏国記』（四世紀後半から五世紀にかけてのインド

が描写されている）や玄奘の『大唐西域記』（七世紀のインドが描写されている）、そして義浄の『南海寄帰内法伝』（七世紀後半のインド及び東南アジアが描写されている）等への関心を深める結果となった。この種の歴史的方法論による仏教の研究は、超歴史的人物としての仏陀や仏陀の活躍したインドの神話化をもはや認めず、それに伴う仏教思想のドクマ化をも認めない。

しかし、実際のところ近代仏教学は、西欧、インド、日本のいずれに於いても完全にドグマ的要素を払拭していない。例えば、上座部仏教の一部の研究者は、今だにパーリ典籍が仏教の最古の記録を示したものであると推定しているが、文献学者はこのような推定を完全に否定している。

このような理由で、長尾博士はFriedrich WellerやJohn Broughの見解をくり返しながら、「パーリ典籍だけによる研究は実りの無い、無意味な研究」[5]だと指摘している。しかし、一方では、大乗仏教の研究者も大乗仏教が小乗仏教より優れていると想定したり、特に大乗が、声聞・独覚・菩薩乗より優れていると見なしたりする。事実、これら三乗の思想は、仏教の伝統が反映されたものであって、単なる劣乗といったものではなく、所定の時代の所定の聴衆のために設けられたものである。こうした教義的偏見は、仏教学者をして基本的な問題に直面せしめる。それは、経典（小乗であれ大乗であれ）が、実際の仏陀の言行を反映しているのかというような問題であるが、それは明らかに文献学的、歴史的研究によって今日では否定されている。様々な経典（パーリ、サンスクリットの存しないものも含めて）、論書、注釈類の作成や伝統的な律やそれに続いて展開した大乗菩薩戒等の編集というようなことは、仏教思想及び教団の展開を反映したものである。近代仏教学は、伝統的な宗派的教義にとらわれる事を排除することが必要である。このような点から長尾博士は、「我々は今日*Sanskrittexts aus den Turfanfunden*といったような重要な出版

物や貴重な中国訳、チベット訳の資料を有している。伝承を異にする同種類の資料や、あるいはそれぞれの伝承の範囲内での比較文献学的研究は、疑いなく部派仏教以前の教義の形成過程を跡付けることができるであろう。」[6]と言っている。

部派仏教以前の教義の研究という事は、後代に見られる思想の系統に密接に関連している概念の究明に他ならない。そして、この種の研究には様々な言語で現存する諸資料を駆使して成されなければならない。平川彰博士の『律蔵の研究』（一九六〇）、『原始仏教の研究』（一九六四）、『初期大乗仏教の研究』（一九六八）等は、パーリ、サンスクリット、チベット、漢訳の諸資料が導入されており、長尾博士が示唆する研究の代表的なものと言える。しかし、この種の研究は西欧語に於いては極めて少ないのが現状である。

第三に、それは恐らく最も重大な課題と思われるが、近代仏教学は、他の学問分野からの批判に堪え得ることができるかと云うことである。例えば、文献学的、哲学的方法に基づく仏教学者達は、それらの方法が正当なものであっても、皮肉な事ではあるが、重要な問題に効果的に応答し得てはいない。それは、完全に客観的立場で仏教を研究している者が、どのように独自の思想を展開し、他の研究分野の思想を触発していくかという問題である。単なる客観的見解は、仏教学の学問的適性の領域をせばめ、そして人間の歴史的運命といった事にはいささかも関与しない。問題は仏教学者は仏教徒か否かという事ではない。それは全く個人的な問題でしかない。問題を少し堀り下げて考えてみよう。客観的見解を強調する近代仏教学の落し穴は、仏教徒が理解し続けてきた仏法に対する希望や抱負を全く無視しているところにある。換言すれば、近代仏教学の落し穴は民衆が理解してきた仏法と学者の興味関心のある哲学仏教との分離ということである。要するに仏教の理論を全く純粋に哲学的に分析したとしても、歴史的展開の中に存

する民衆によって育成された信仰・実践的仏教を説明することはできない。歴史的人物としての仏陀の意向は、決して実在する人類の事を無視せず、永遠の危機にひんする人類のために智恵を授けることが主題とされたからこそ世界文明に大きく貢献してきたのである。このような意味で、良識ある仏教学者と良識ある他の学問分野の人々（例えば宗教学者）の協調によって仏教研究に新たな分野が展開するのではなかろうか。仏教を単に一九世紀後半のヨーロッパに於ける合理主義哲学と同じような範疇で把えている限り、新たな研究分野は展開しない。現に一九一七年に Rudolf Otto は *das Heilige* 的要素を強調し、信仰の実践や敬虔主義が人間存在の上で重要な意義を有することを指摘している。又、ポーランドの仏教学者 Stanislaw Schayer は、Oldenberg が仏陀を全く史的実在人物としてのみ把えようとしたのに対して、もし仏陀を歴史及び社会的倫理という範囲内でのみ把えようとするならば、仏陀は何人も感化することはなかったであろうし、仏教は二五〇〇年にも亘ってアジアの諸民族の宗教的心情の基礎とは成り得なかったであろうと主張した。この点は、山口博士や英国の著名なインド学者 Arthur L. Basham や、オランダの著名な中国学者 Erik Zürcher らも明らかにしている。

このように、E. J. Thomas の *The Life of the Buddha as Legend and History*（一九二七）、Alfred Foucher の *La Vie du Bouddha d'après les Textes et les Monuments de l'Inde*（一九四九）、渡辺照宏博士の『新釈尊伝』（一九六六）等は、*das Heilige* 的要素を巧みに考慮して仏陀の生涯を描いている。Rhys Davids (*Gotama the man*, 1928) が成したように、初期の仏教の内容を宗派的伝統のみを基礎にしたり、ただ合理的側面だけを論じたりしては、歴史的には不正確な仏教となる。このような仏陀の解釈の試みは、仏陀のあらゆる性格のなかにある一面だけを示すものであり、仏陀の合理的側面を強調するあまり、インド及び他のアジア諸国の民衆の間で後に展開した仏教の信仰の実践や敬虔主義の基

礎を全く無視している。我々は、仏教も他のあらゆる世界宗教と同じように、独自の神話や信仰の実践や救済論が含まれており、とりわけ大乗仏教には、超越的仏陀（法身）という観念の存することに留意しなくてはならない。

今や〝仏教学〟という言葉に新たな定義が必要となった。それは、人文科学の分野に属し、仏教文献の研究ではあるが、それら文献の内容を解釈し、更に世界文明の中におけるその役割をも解明しなければならない。仏教文献学の研究は、何もそれらの内容のおうむ返しを意味するのではなく、それらが何を言おうとしているかを、他にも理解可能な方法で説明することである。この新たな定義は何も、十九世紀のヨーロッパに発達した近代仏教学の価値を無視することではない。何故ならば、近代社会科学が如何に新たな理論や方法論を考案し、我々に研究の補助を提供してくれても、仏教文献の翻訳が完備していない今日では、それらの理論や方法論を利用することができない。この様に近代仏教学を考慮した時、我々は、十九世紀のヨーロッパで培われた文献学、歴史学的方法論を賛美せざるを得ないのである。何故ならば仏教文献が仏教学者によって翻訳された時に始めて、仏教学者と他の分野の学者（例えば宗教学者）との対話が可能となるからである。しかし、残念な事に、アメリカでは、五世紀から八世紀にかけての中国、中世のチベットや日本、そして今日のフランスや日本に代表されるような翻訳事業は極めて少ない。

結語として近代仏教学の意味を要略しよう。近代仏教学は文献学的、哲学的、歴史的関心に付随してもたらされるのであり、先走った推論や宗派的ドグマへの関心によってではない。しかし、同じく重要な事は、仏教研究は人文科学の一分野として発展してきたことと、一般仏教徒達がその伝統の一分野を担っているという意識をもたらすことである。仏教学は仏教思想とその思想を奉戴する人間の研究である。先に述べた種々の事柄を含めて、ここに日本人と西洋人とのダイアローグを強く促す次第である。

註

(1)′ Paul J. Griffiths. "Buddhist Hybrid English: Some Notes on Philology and Hermeneutics for Buddhologists." *The Journal of the International Association for Buddhist Studies.* (Madison: University of Wisconsin), Vol. 4, No. 2, 1981, pp. 17–32. 特に彼がConzeの業績からの引用についての箇所（p.29）を参照されたし。

(2)′ Edward Conze. *Buddhist Thought in India*, (London: George Allen and Unwin, 1962, First Edition), p. 7.

(3)′ Edward Conze. *The Memoirs of a Modern Gnostic* (Part I) (Sherborne, England: The Samizdat Publishing Co., 1979), pp. 58–59.

(4)′ *op. cit. Buddhist Thought in India*, p. 200.

(5)′ Nagao Gadjin. "Presidential Address." *The Journal of the International Association of Buddhist Studies.* (Madison: University of Wisconsin) Vol. 1, No. 2, 1979, p. 83.

(6)′ *ibid.*, p. 83.

（これは一九八三年十一月十一日に真宗総合研究所で行なわれた講演である。）